京都大學經濟學會經濟學會經濟論義

第六十四卷 第四·五·六號

京都大學經濟學部創立三十周年

記念論文集

第二集

アク	ヺム・スミ	ミスの價値論 岸	本	滅	二郎
カレ	ノツキー ℓ	ン『獨占度』と分配機構	津	一克	s =
原作	質計算法@	O理論的性格····································	部	禾	月良
第一	一次大戰領	後の外資輸入 期	江	. 係	と蔵
初	期 獨	占期	江	英	ē -
財	閥	考静	囲		均
跋	文				

岸

本

誠

묈

『國富論』に於ける價值論の位置

史的性格を有する。 ある。價値論は基礎理論であるとはいえ、 價値論は經濟學の基礎理論であり、 これはアダム・スミスの價値論の如き古い價値論を扱う場合に特に注意しなければならぬ點で 一定の普遍性を有するものであるが、 一定の歴史的前提を有するから、 スミスが當然のことと考えて推論した 實際には經驗の歷史性に制約されで歷

ことも、今日の吾々にとつては必ずしも然らざることがあり得るからである。

いた。 偶然の機會や利己心の解決に放任せらるべきではなかつた。この國家思想とそれより生じた取締及び制限政策は、 間生活の全體を包含する目的をもつた宗教的團體であると考えられ、あらゆる點で個人を監督し保護するものであ しつつあつたが、未だそれは産業自由の近代的原則によつて代位せられるに至らなかつた。 ところでスミスは中世の封建制が崩壊して英國に於ける近代資本主義經濟が漸く形成されんとする時代に立つて 一七六〇年の英國はなお相當に細かな雜多の中世的の産業的収締りのもとにあつた。その制度は事實上衰徴 もとより國家は法定利率、 公正なる賃金及び確質なる商品を確保するものであり、 人間生活に重要なことは 中世に於ては國家は人

スミスの價値論

第六十四卷 二〇九 第四、五、六號

自由であり、 アダム・スミスが 同時代のフランスやプロシャに於けるような地方的關稅障壁は存在しなかつた。しかも勞働及び資本 『國宮論』を書いた時代にもなお英國産業に人なる影響を與えていた。 貨際 國内商業は大いに

に對しては依然として制限の網が存在していた。徒弟法もある程度制限せられるようになつたが、それでも廣汎に 組合は商品の價格と品質とを監督していた。スミスが組合に對して强く非難した當時に於て、バ

質施されていた。 ・ミンガムやマンチエスターは旣に自由都市として繁榮していたが、グラスゴーでは組合の間約が强く行われてい

治安判事による賃金の制定も、 中世主義の遺物として行われていた。勞働者の凶結も法律によつて禁止されてい

た

た

A. Toynbee, Lectures on the Industrial Revolution of the eighteenth Century in England, 1884, pp. 51-54

外國貿易については取締りは嚴重であつた。貿易は特許會社によつて營まれていた。*

化を重要視し、これを以て直ちに産業革命の主要特質となすことはできない。 中世のこの封建的諸規制はスミスの時代には漸く崩壊しつつあつた。尤も保護主義的規制から自由と競爭への變 これは結果を原因と誤解し、

質の法的側面を事實そのものと諛るものである。占い法律の制約を破つたのは新しい産業組織と産業方法であつた

のである。

P. Mantoux, The Industrial Revolution in the eighteenth Century, 1929, pp. 84-85

理論である勞働價值學說も一定の歴史的性格を有するものであつた。 それはともかくとしてスミスの經濟學はこの變化に則應し、これを推進せしめる意義を有した。 との點は重要であつて、スミス以後の勞働價 從つてその基礎

本家的のものであり、 價値學説であつても前者は資本主義の成立・興隆期のものであり、後者はその矛盾期のものである。 派の價値學説であり、 握しなければならぬ。 値學說の發展を見る場合にも、 後者は勞働者的のものである。 後段はマルクスの價値學説である。 この意味に於て勞働價值學說の發展に二つの段階を分つのは重要である。 抽象的 に理論の變化の筋を見ただけでは十分に理解し得す、 これはスミスの勢働價値學說を扱う場合の重要な觀點となる とれは理論の精粗の進化の段階でなく、 その歴史的意義より 即ち前段は古典學 兩者は同じ勞働 或は前者は資

ものである。

きまるということが研究の焦點とされている。 の國民の年々の消費の源となること、並にそれとそれを消費する人口數の多少如何によつて、 置である。『國富論』にはその最初に本書の説明の構造が述べられているが、 そこでスミスの價値論についてまず注意しなければならぬのは、『國富論』のうちに於て價値論の扱わ 生産と分配の關係の規定が重要となるが、價値論はこの兩者を縫いつけるところの交換の基礎理論と考えられ、 ここには勞働による生産とその結果を國民の間に分配する問題があ それによると各國民の年人の勞働がそ 物資の供給の多少 乳 てい る位

それ以上富の生産の基礎ずけは顧みられていない。

から脱せしめることであつた。*勞働の價值的性質を立入つて規定するならば、 本であるという思想は、 の段階ではそれは未だ顯著な重要問題でなく、 もとよりすべての國民の年々の勞働は元殊その國民が年々消費するところの生活の必需品と便利品を供給する元 ス ミス經濟學は價値論より說き起されているのでなく、 勞働價值學說 の基礎をなすものであるが、 所謂富の生産が、 分業、 分配と引離された形で、 ス Ē 市場、 ス が重要視したのはこの勞働を 分配の矛盾が明か 貨幣、價値の順序で展開 重要と考えられ にされ されてい るが、 封建的 たので ス Ξ

アダム・スミスの價値

第六十四卷

_

第四、五、六號

ある。 Ġ, これをこれ以上に深めなかつたのは、 かかる生産がふえさえするならばすべての問題は解決されると考えられた。 その必要がなかつたからである。スミスの立つ歴史段階では、 實際は勞働價值學說をとりなが スミスの

Cf E. Cannan, A History of the Theories of Production and Distribution, 3rd ed. 1924, p. 43

寧ろそれだけで必要にして十分なる理論であつたのである。

價値論は不完全であつたというよりも、

するが、 が自然に守るところの法則は如何なるものであるかということを研究しなければならぬが、これらの法則は財貨の の交換の法則は價値論の端緒となるもので、價値論はそれ以上に生産並に分配の內部關係を規定する法則を內容と 相對價値または交換價値と呼ばれるものを决定するもので、これが價値論研究としてとり上げられたのである。*と スミスの價値論の問題提起は、 スミスに於ては價値論はそこまでは滲透せず、また滲透する必要もなかつたのである。 The Wealth of Nations, Cannan's ed. Vol. 1, p. 30, 大内譯(一)、六四頁。 市場、 貨幣の説明につづき、財貨を貨幣または他の財貨と交換するについ て人々

價値の基本的規定

た 用價値は極めて小でも、交換價値大なるものもある。とのためにスミスは交換價値の量的規定から使用價値を斥け も使用價値の大小に比例しない。 さてスミスは價値論の研究を使用價値と交換價値の對立より出發せしめた。彼によれば交換價値の大小は必ずし 水の如く使用價値大なるもの必ずしも交換價値大ならず、 ダイヤ ンドの 如く使

水とダイヤモンドの價値矛盾はスミス以前に於ても旣にロツク、 ハチスン、ロー及びハリス等によつて指摘され

スミスはこれを單純に踏襲したのでなく、それによつて暗示されたではあろうが、 それ以

上に彼の實證的經驗に基いて扱つたのである。

うることでなく、 なく、具體的に一定量の財貨によつて欲望を滿すことである。 學派によれば、 ヘミス 財貨の效用は遞減し、 の使用價値と交換價値の矛盾についての説明は、 欲望充足にあてられる財貨量如何によつて異なるのである。 との場合重要なのは抽象的にある財貨の效用或は使用價値が大であるか小であるかということで 所謂效用遞減の法則が作用する。 後にオーストリヤ學派から批判された。 そこで財貨の效用の大小は財貨一般について問題にし 一定の欲望を一定財貨の一定量づつで順次漏すなら スミスはこの點を看過したというの ኑ

ない。 ある。 難さるべきととでなく、 ミスは價値法則としての統一原理を求めんとしたのだから、 る條件は存在しなかつた。 興えられた財貨量と欲望の關係を規定することは意味のないことであつたのである。 スミスがオーストリヤ學派の意味に於ける財貨數量を問題にしなかつたのには歴史的理由があつたと思う。 スに於ては吾 個々の財貨がばらばらに扱われず、分業的生産と市場を通じ商品世界を構成するものと考 オーストリヤ學派の時代の如く、 まず財貨を生産することが解決されなければならぬ問題であつて、それと引離しての經濟上の價值問題 その欲望を滿す財貨を生産することが當時の社會として重要であつて、 水やダイヤモンドの例によつて使用價値を説明したそのことが具體的實證的であつたので スミスに於て使用價値を論ずるのに財貨數量を無視したことは、 資本主義經濟が瀾熟し、 この規定は歴史的に最も具體的であつたのである。 市場に財貨が溢れ、 中世末期に於て社會の生産力 財貨を生産と切離して扱いう それと切離して抽 抽象的觀念的 えられ そとにス なりと非

アダム・スミスの價値;

第六十四卷

= = =

չ

として反對する彼の節約的なスコットランド的慣習により、 彼はダイヤモンドは殆ど何等の使用價値をもたずと結論 、グラスはスミスが使用價値を交換價値の説明から斥けた一つの理由として、 彼の道德的感覺をあげている。 第六十四卷 二四四 第四、五、六號 即ち虚

5のである。* これは一つの解釋にとどまるが、興味深いどく自然な解釋である。ここには封建貴族的觀念から近代市民的觀念·

2化が使用價値判斷の逆轉に反映せしめられている。

使用價値を交換價値の說明から除くと、價値は勞働によつて決定する。もとよりこの規定には財貨の生産とい P.H. Douglas, Smith's Theory of Value and Distribution (Adam Smith, 1776-1926, by J.M. Clark etc. 1928) p. 80

ととが前提となつている。スミスの言葉では次のように説明されている。 「ある商品の價値は、 それを所有し、しかもそれをみずから使用しまたは消費しようとは思わず、それを以て他

量に等しい。それ故に勞働はあらゆる商品の交換價值の尺度である。 商品と交換せんことを欲する人にとつては、その商品が彼をして購入せしめ、または支配せしめるところの勞働

する人にとつて、眞寶にどれだけの價があるかといえば、それはそれによつて彼がみずから省くことができる骨折 のは、それを得るための骨折と苦勞である。すべての物は、それを獲てそれを賣却し、またはそれを他の物と交換 であつた、 まれておるので、 とである。 それは勞働をもつて買うのであつて、それはあたかも吾々が物を獲得するのは自己の肉體の骨折によるのと同じと と苦勞であり、またそれが他人に課することができる骨折と苦勞である。貨幣または財貨をもつて物を買うとき、 「すべての物の眞實價格、即ちすべての物がそれを獲んとする人をしてそのために眞實に支拂わしめるところの その貨幣またはその財貨は實に吾々にこの骨折を省いてくれる。蓋しそれには一定量の勞働の價値が含 あらゆる物に對して拂われるところの本源的購買貨幣であつた。世界におけるあらゆる富が始めて買わ 吾々はこの時同量の價値を含むと考えられる物と交換するのである。 かくして勢働は最初の質

と交換しようとする人々にとつて、との價値はそれが彼をして購買しまたは支配し得せしめるところの勞働 れたのは、 金または銀を以てではなくして、勞働をもつてであつた。 それ故との富を所有し、 それを新しい生産物

正確に等しいのである。」 「勞働はあらゆる商品の交換價値の眞實の尺度である。……」

だこれらの名目價格である。」 \ر ر 「勞働のみはそれ自身の價値において不變であつて、それのみはあらゆる商品があらゆる時代とあらゆる場所に 測定され比較されるところの、 究極の且つ真實の標準である。 **勢働はごれらの眞實價格であつて、貨幣はた**

j,

種の物品の眞實價値は世紀から世紀を通じて、とれに對して支拂われる銀の量によつて測ることはできない。 ばそれは吾々があらゆる時とあらゆる處において、 「勢働は價値の唯一の一般的尺度であり、また同時にその唯一の正確な尺度であることは明かである。言いかえれ 諸種の物品の價値を比較しうるところの唯一の標準である。 世紀

から世紀を通じても、 また吾々は年々においても穀物の量によつてそれを測ることもできない。しかるに勞働の量をもつてすれば、 Smith, The Wealth of Nations, Cannan's ed. Vol. 1. p. 32 et seq. 大內譯(一)、六七頁以下。 また年々においても非常に正確にこれを測ることができるのである。*」

ことに價値を決定する勢働はまず「それを得るための骨折と苦勞」であるという。これは物を生産するに費され 即ち所謂投下勞働を意味するが、それは交換によつて「彼がみずから省くことができる骨折と苦勞であり、

ものと他人の費すものとは必ずしも同一ではなく、 またそれが他人に課することができる骨折と苦勞である。」あるものをつくるについての骨折と苦勞は、自分の費す **勢働生産力が同一なる場合にのみ同一である。** ととではとのよ

スミスの價値論

第四、五、六號

第六十四卷

二 六

うな場合が前提されている。 てくれるが、それは貨幣に一定量の勞働の價値が含まれているからである。勞働は最初の價格であり、 貨幣で物を買うことは、 それによつて吾々が物を獲得するに要する骨折と苦勞を省 本源的の

買貨幣であるというのである。

勞働で、交換財貨或は貨幣によつて買われる勞働力であり、寧ろ勞働力を買取る賃金を意味する。 入せしめ、 だけでなく、交換に於て支配される勞働を意味している場合がある。後者はある商品の價値がその所有者をして「購 他人の勞働についてはなお不明な點がある。 または支配せしめるところの勞働の量に等しい」という場合である。これは交換を遜じて支配せしめる 即ちスミスに於てはそれが他人の投下した勞働量であるという場合 この點は後に說

明する價値分解說と關連する。

品の價値は、 働にあることは豫定されていると思われる。 換することを欲する人にとつては」云々と述べ、商品の社會性を注意している。また商品價値を決定する勞働に から分業的生産から出發し、 ていなければならぬ。 に考えられているのも、 ス ミスの説明では價値の源泉と尺度の區別が明確でない。 みずからの費す骨折及び苦勢とみずからの骨折及び苦勢を免れるために他人に課する骨折及び苦勢とが同 それを所有し、 その勞働はまず個人的勞働でなく社會的勞働が考えられていたであろう。 自他の勞働が代替しうる社會的なものとして理解されていたことを示すものといえよう。 しかもそれをみずから使用しまたは消費しようとは思わず、それを以て他の商品と交 社會的に連絡のある勞働を考えていた。 從つてそこには價値の源泉となる勞働についての一定の 價値の尺度に重點がおかれているが、 價値論の初めに於ても、前述の如く、「ある商 蓋しスミスは最 價値の源泉が 質 が豫想され 鈐

し價値をつくる勞働と使用價値をつくる勞働との區別が明確でなく、

使用價值

富の増加が價値の増加と混

勢 加と質 く形成されんとした當時に於ては使用價值、 同されているために、 いかにも不完全のようであるが、スミスの歴史段階に於てはこれで十分であつたのである。 の存在することを明 々なる使用價値をつくるところの社會的に差異ある勢働であつた。 値 の増 加を平行 分業的生産關係に結びつく社會的勞働は、 的調 一確にする必要がなかつたのである。 和 的に考えてよかつた。 宮の増加と價値の形成及び質現の間には矛盾は生ぜず、 從つて差異ある使用價值生產勞働の基底に一般的なる價值生產 價値をつくるところの社會的に一般的な勞働 スミスに於ける社會的勢働のとの理解は 蓋し資本主義經濟が 使川價 値の でな 塷

てい らく 果である。 人間 がやがてこの認識を必要とすることを無視したわけでもない。 經濟學も啓蒙期 であろう。 に基すくところが多いと思われる。 いるところよりは小さいものである。 袙 た が が おか である。 瓦によく似寄つたものであつて、 ぇ と れ げであるように見えるけれども、 ž この頃またはその後間もなく、 非常に異つた人間の差、 ス <u>に</u> そとに於て彼の論ずるととろによると、 の他の思想家たちと同様に、 がごく一般的なる思想にとどまり、 般的なる價値生産勞働の基礎すけの餘地あることを否定したわけでなく、 彼等がこの世に生れてきたときも、 例えばその邊の人足と學者の差の如きも、 種々の職業の人が壯年期に達したどき、 | 吶親でも遊び友達でも彼等の間に非常に著しい差異を見ることができな 彼等は異つた職業につくのである。 多くの場合、 自由にして平等なる近代的人間像より出發した。 具體的なる理論として展開されなかつたまでであつ 種 との天分の差は分業の原因ではなくして、 々の人間の自然の才能の差異は、實際には **寧ろスミスは當初から社會的一般勞働の觀念を有** またこの世に生存した最初 差異の現われる所以は、 自然の性質よりは習慣や慣行や教 との時になって才能の違 彼の分業論は一つの また現實 の六七年 吾 むしろその その特異 Ø しゃが V 經 が 濟發展 知 現わ ス <u>~</u> Ē 舩 ス

アダム・スミスの價値論

九

第六十四卷

第四、五、六號

ないようにまでなるのである、 その程度が順次高まるのである。そして遂には學者はその虚榮心にもとずいて何らかの相似さえ仲 と考えられた。*

* Smith, op. cit. pp. 17—18, 大丙譯(二)、四二—四三頁。

わなければならぬ。 てとのような人間像を基盤とする勞働は元來社會的一般勞働であり、とれが社會的に差異ある勞働に發展するとい とこにスミスは人間は元來自然的には平等で、 そしてこの發展の契機となるものは交換であるとスミスは考えたようである。 種々な差異を生ずるのは慣習や教育の結果であると考えた。

るとスミスが考えたのは極めて自然であるが、この交換は差別化と平均化の互に矛盾する二職能をもたしめられて なすところの交換によるとなした。封鎖されない解放されたる近代的人間像に於て、交換が人間性質の一特質であ スミスは分業論に於て、分業の發生する原因はその利益を豫見する人智にあるのでなく、人間の性質の一特徴を

別を生ずるが、 ならば、 活動を營むならば、 業務の差が才能の上に非常な差異を生ぜしめることはあり得ないであろう」というのである。 とれは交換する人間性質によつて媒介されるからである。 差異は生じない筈である。 「すべての人が同じ義務を果し同じ仕事をしなければならぬとする 交換が行われず、 人間が各々自給自足の 人間は元來

さきにスミスの言葉を引用したように、

人間は元來自然的には平等で、成長するに從い、

習慣や教育によつて差

ある。

平等で差異のないものであるが、その人間のもつ交換する性向が、

人間に差異を生ぜしめる契機となるというので

かるに交換を媒介として使用價値生産勢働に、 或は勞働生産力に差異を生ずるが、 そうなると交換に於ける商

スミスの言葉でいうと、 に均一であり、量的に比較しうるものでなければならぬ。 品價値の置替えに基準となるものが問題となる。即ち勞働は價値の源泉であるばかりでなく、 次のようである。 かかる價値尺度の形成も交換によつて果されるのである。 價値尺度として質的

二つの異つた量の勞働の比を確定することは、 「勞働はあらゆる商品の交換價値の眞の尺度ではあるが、その價値が普通に測られるのはそれによつてではない。 しばしば困難である。二つの異つた仕事に費される時間のみでは

確なる尺度を發見することは容易なことではない。 簡明なる業務の一ケ月の勤勉よりも、より多くの勞働を含むことがある。 含んでいることがある。 た同様に計算に入れなければならない。一時間の困難なる作業は二時間のやさしい仕事よりも、 必ずしもこの比を定めることはできない。 またそれを習得するのに十年の勞働を必要とする職業においての一時間の勤務は、 そのために忍んだ困難の程度並にそのために用いられた工夫の大小もま 種類の異つた勞働の生産物を相互に交換するに際しては、通 しかしながら困難や工夫というもの より多くの勞働 普通 の正 Ø

の折衝によつてなされるものであつて、大體の公平が得られればよいので、 とれら兩者に對して多少の斟酌を加える。 けれどもそれは正確なる尺度によつてなされるものではなくして、 たとえ正確ではなくとも日常生活の仕 市場

* Smith, op. cit. p. 33, 大內譯(一)、六九—七〇頁。

事をやつてゆくには、それで差支えがないのである、」と。*

成されるが、かかる人間の有するところの交換する性向は、 これは非社 との場合交換は異質的なものを均等化する働きを有する。 一會的なものを形成するのでなく、交換は却つてそれを交流せしめる。 分業を促して個々の異質的なものを形成するけれ 近代的人間の成立により社會的に一般的なるものが形 このことは近代的人間の基本的性

アダム・スミスの價値論

第六十四卷 二一九 第四、五、六號 一

五、六號

格たる社會的 般的なるものが、 **勢働によつてみずからを貫いていることを示す。**

うちに あるが、 後のリカア の重要なる一主張があり、 のである。*成程スミスの言葉では交換、 合スミス 異質 (的な勞働 人間勞働の異質的分化と異質勞働の等質化えの還元が行われることを看過してはならぬ。 は 交換は媒介となるにとどまり、 勞働 F, æ 生 によつて市場價値を説明するのでなく、 ~ ル 産物の交換には市場の折衝によつておのずから一定の價値尺度が生ずるというスミ クスの類似の見解と同様に、 この點はスミスに於ても十分に理解されていたところである。單なる交換、 卽ち需要供給の反復が落着いたところで、勞働量の比率を確かめる如くで その基底に於て價値形成の生產行程が社會過程として進行し、 今日非難されるところである。 反對に勞働量を說明するのに市場價値に訴えているという 例えばダグラスによると、 ととに勞働價値說 ス との過 の見 需要供給で との場 解 程 は

* Donglas, op.cit. pp. 81-82

問題を解決せんとするならば、

價値論はなくなつてしまうであろう。

三、價値の量的規定

その交換價値はそれをもつて購入し得る勞働の量をもつて測られずして、 ではあるが、 つてそれと比較されるよりも、 むしろ自然である。 ス ハミス は價値の量的規定、 價値は普通に直接に勢働によつて測られない。 大部分の人々にもまた特定の商品 價値尺度の問題を詳論する。 よりしばしばその他の商品と交換されることによつてそれと比較される。 のある量の方が勞働の一定量というよりは、 彼によれば、 またあらゆる商品は直接に勞働と交換されることによ **勢働はあらゆる商品の交換價** それ以外の物品の量によつて測 その意味 値 の眞 それ故 られ の尺度 b

かゝ 何に分り易く說明しても前者ほど自然な明白なものではないからである。* り易いに相 違ない。 前者は平明な觸知し得べき物品であるが、 後者は一種の抽象的概念であつて、 たとえそれを

op. cit. Bk. 1., Chap. V. p. 32 et seg. 大內譯(一)、六七頁以下。

よつて測ることが普通に行われるようになるのである。 はそれと交換において得られるところの他の商品の量によつて測られないで、それよりはよりしばしば貨幣の量に 交換されないで、それよりはよりしばしば貨幣と交換せられる。 しかしスミスによると、物々交換がやんで、貨幣が商業の一般用具となると、あらゆる特定の商品は他の かくしてすべての商品の交換價値は勞働の 一量また

K の標準である。 それのみはあらゆる商品があらゆる時代あらゆる場所において、測定され、比較されるところの究極のそして眞實 にとつては相等しき價値をもつといえるであろう。それ故にただ勞働のみはそれ自身の價値において不變であつて、 ことがやさしく、 しかしながら他の一切の商品と同様に金銀もその價値を變じ、 他の商品の價値の正確な尺度とならない。 **勢働がこれらのものの眞貨價格であつて、貨幣はただこれらのものの名目價格であるとスミスは考** ある時は困難である。 從つてスミスによると金銀のようにそれ自身の價値が絶えず變化する商品 しかるに勢働の相等しい量はいつ如何なるところにおいても勞働者 ある時は安く、 ある時は高く、またある時は買う

ならないというが、そうではない。貨幣價値が變化すると、 體的な尺度となるのは金銀貨幣である。 ことにスミスは價値尺度を求めて勞働と貨幣とを比較した。 しかし金銀も他の商品と同様にその價値を變ずるから、 諸商品の價格は一様に騰貴し或は下落するが、 究極の價値尺度は抽象的な勞働であつて、 正確な價値尺度と 現實の具 えた。

× スの價値論

第六十四卷

四四

よつて諸商品の 加瓦 の價値關係が變化するものではない。 價値の不變なる商品は存在しないが、それだからといつ

金銀貨幣が正確な價値尺度とならないということもあり得ない。

長短を地代と賃金の價値について檢討する。 スは求める。そのために彼は更に金銀貨幣と穀物とを問題とする。そして彼は價値尺度としての金銀貨幣と穀物の 價値尺度として勞働は 「一種の抽象概念」でわかりにくいので、 「平明な觸知し得べき物品」で測ることをス

價値が變ることから生する變動である。これに反し穀物で留保せられる地代は、鑄貨の名目に變化がなかつた場合 定の貨幣額できめるならば、その價値は異つた二種の變動に會う恐れがある。その第一は同じ名目の鑄貨の内に含 まれている金銀の量が時代によつて變ることから生ずる變動であり、第二は金及び銀の同一量が時代が變ればその でも、貨幣で留保されるより遙かによくその價値を保持することができた。それ故に久しい時間をへだてて見れば スミスによればまず永代地伐を留保し、それをつねに同一價値のものたらしめんと欲する場合に、この地代を

いずれのところにおいても生活必需品の時々の、または一時的の價格ではなく、それの平均のまたは普通の價格に かしながら穀物地代の眞質價値は貨幣地代のそれに比して、世紀世紀を通じて變動することはより少ないけれ 年々においてはより激しい。 勞働の貨幣價格は穀物の貨幣價格に應じて年々に變動するものではなくして、

穀物の同一量は他のものよりも、より正確に同一の賃賃價値を表わすとスミスは考えた。

ミスによれば銀の價値は世紀世紀を通じては大いに變動しても、その年々の變動は殆どない。 な半世紀 また

適應するものと思われた。

は一世紀もの間不變または不變に近いことも多い。そこで穀物の普通または平均の貨幣價値もこういう長い期間!

同 一に近いかぎりは、 または同一に近く維持されるのである。そして少くともその社會がつづき、他の點に於て事情が同一または同 それとともに勞働の貨幣價格もまた不變である。しかしこの間、 穀物の時々のまた一 時的 Ø

格は二倍になることがあるという。

貨の含む金屬量の變化ということをあげているが、これは金銀の價值變化でなく、價格の標準の變化である。 見ると、 物よりもその價値の變化が少ないといえよう。 變動が著しい 金銀貨幣と穀物の價値についてのスミスの以上の説明には混亂があるようである。 端境期などで變動するのは需要供給關係の變化によるその價格であつて價値ではない。 穀物は耕作方法の改善等により金銀よりも却つて價値の變化が大であるとも考えられる。 //× 幾世紀にも亙つて見ると變動が少ないと考えているようである。 スミスは貨幣の價値の變化の激しい一理由として、 しかし穀物が一年のうちの收穫 穀物の價値は年々について 幾世紀の永きに亙つて 同一の名目の鑄 金銀は總じて穀 と の

の量をもつてすれば、 つて測ることはできない。 それにしても勞働は價値の唯一の一般的尺度であり、 言いかえればそれは吾々があらゆる時あらゆる處において、諸種の商品の價値を比較しうるととろの唯一の 世紀 スミスによれば諸種の商品の真質價値は世紀から世紀を通じて、 から世紀を通じては穀物は銀よりもよい尺度である。 吾 À また吾々は年々においても穀物の量によつてそれを測ることもできない。 は世紀から世紀を通じても、 また同時にその唯一の正確な尺度であることをスミス また年々においても非常に正確にこれを測ることができる 蓋し世紀から世紀を通じては穀物の同一量は これに對して支拂われる銀の量によ かるに勞働 は認

合には地代等の價値保持には貨幣以外の商品であれば、勢ために生する價格の一般的騰貴は鑄貨の價値下落であり、

穀物に限らず、何れの商品でも等しく有效である。

諸商品相互の價値關係には變化はない。

從つてかかる場

第六十四卷 二二三 第四、五、六時

値

、 六號一五

二四四

邸 よりもよい尺度である。 0 同 しスミスによれば同時同場所においては、 一量よりも勞働の同一量を支配し得るにより近いからである。 蓋しその同一量はより正確に勞働の同一量を支配するからであると考えられた。 あらゆる商品の眞寬價格と名目價格とは相互に正確に比例するも これに反して年々についていえば、 銀は穀物

貨幣はこの時との場所において諸君をしてそれに應じて一定の勞働を購い、または支配することを得せしめるであ ろう。それ故に同じ時同じ場所において貨幣はあらゆる商品の真質の交換價値の正確なる尺度であるとされている。 のである。 いしながらそれはただ同じ時同じ場所に限つての話である。 例えばロンドンの市場において、諸君がある物品を提供して得る貨幣が一定の增減をなすならば、 その

が勢働の時價につねに正確に比例するというわけでもないが、それに比例するものとして吾々のもちうる最も近似 **述家の注意するところとをつている。それ故に一般的には吾々はこれをもつて禰足するしかない。というのはこれ** 的なものであるからだと考えられた。 的に記錄されているところは極めて少ないとはいえ、 かるに時と所とを異にする勞働の時價はとれを正確に知ることは到底できない。 一般によりよく知られていて、よりしばしば歴史家その他著 ただ穀物の時價はたとえ規則

互の價値關係には少しの變化もなく、價値尺度として少しも不適格ではない。 り貨幣價値が低落し物價が騰貴しても、とれは諸商品の價格に一様に現われるところで、 目の鑄貨の含む金屬量の變化、 ス 、ミスは以上のように穀物が幾世紀もの永きに亙つて價値尺度として適當であるというが、 また金銀は年々の價値尺度としてはよいが幾世紀をも通じては不適格であるというが、 即ち價格の標準の變化や、金銀の生産技術の改善或は豐富なる新鑛脈 各時點に於ける諸商品相 それは上述の如く必 の開發等によ 司

呵 價 値. 分 解 論

要因が結合され、 地 明から見よう。 ならね。 の三生産要因はそれぞれ勞働者、 商品價値は元來それを生産するに必要なる勞働量によつて定まるが、資本主義社會に於ては勞働力、 スミスはこの そとでこの點から考えると價値問題は勞働による價値形 生産が行われたる結果の商品價値は、企業者とこれらの生産要因所有者の間に分配されなけれ 問題を『國富論』の第一篇第六章で扱つたが、その解決は容易でなかつた。 資本家及び地主に分有されているから、 成問題と分配に於ける價值分解問題 資本家的企業者を主軸としてこれらの まずスミス自身の説 の二面を有る 資本及び土

る勞倒 ば くの如 ものの二倍の値をもつことは自然である。もとよりかかる場合にある種の勞働が他の種の勞働に比して激しいとか、 の生産に通常二日の、または二時間の勢働を要するものは、その生産に通例一日の、 れるという。 る勞働量 或はより多くの技巧と工夫を要するならば、 彼によると、 き事情のもとに於ては、 頭の海狸は當然に二頭の鹿と交換されるであろう。 の量は、 での間 例えば狩獵民族の間で一頭の海狸を殺すには二頭の鹿を殺すだけの勞働が通常必要であるとするなら の割合は、これらの物品を相互に交換するための何等かの規則を與えうる唯一の事情であつたと思わ 資本の蓄積と土地の私有に先立つ初期未開の社會に於ては、 通例その商品をもつて購い、 勞働の全生産物は勞働者に属する。 それ相應の斟酌が價値に加えられるであろう。が、 支配し、 またはそれと交換せられる勞働の量を律し得る唯一の事情で 或はそれは二頭の鹿の値あるものとされるであろう。そ そしてある商品の獲得または生産に普通 種々の物品を得るために必要とせられ または一時間の勞働を要する いずれにしてもか に要す

第六十四卷

三五

八

第六十四卷

あると考えられ

* A. Smith, op. cit, pp. 49-50, 大内譯(])、|〇〇-1〇|頁。

價値の源泉或は實體と考えられた。そして勞働が富或は價値の源泉として單純に認識されるには、 明の意味を有する。 ければならぬ。 値の説明である。 ている封建的制約を除いて自由なる社會を質現する必要があつた。 體スミスの價値論は主として第一篇第五章に說かれているのであるが、 第一、二章の分業を中心とした生産論は、 價値の源泉或は實體の說明はこのうちにはあまりないが、 分業に於ける勞働は國民が年々消費するところの官或は商品價値を生産するのであり、 價値と富とを混同してはいるが、ある程度價値源泉の説 それは大體に於て價值尺度並に貨幣價 しかし當然に前提されていると考えな 勞働を縛りつけ 云わば

問題 般的なる、 既にスミスの歴史段階に於ては中世封建的諸制約を脱して近代社會が形成されつつあり、 斷つている。*このように勞働價値は理解しぬくい抽象であるが、 とをもつて讀んでほしいが、 成されんとしたものであるから、 分りにくい説明ともなつたのである。 との點は經驗科學としての經濟學に於て微妙な認識上の問題となる。 は難かしく説明には大いに努力し、 とれは餘りにも形式的な解釋であり、 或はやがて一般的ならんとするところの經驗として得られていたのである。 しかも價値論の性質上非常に抽象的であるので、 スミスの鋭い理性によつて世人の理解を導くことが必要であり、 明晰を期するためには冗漫に流れるととも辭せず、 ウイザ ーはスミスのこの理論を「經驗的」 むしろスミスの價値論を誤解するものである。 しかしそれは單純に形而上學的な構想ではない。 即ちスミスは價値論を說くに當つて、 幾分か曖昧な點も殘るかもしれぬ に對して「哲學的」 漸く一般的なものとして形 勞働價値の觀念も現に一 讀者も特に忍耐と注 スミスのこの理論 しかもそれが仲 理論と評 ح Ł は

抽象的ではあるが、これも一つの經驗的の基盤を有するものである。

* A. Smith, op. cit. pp. 30—31, 大內譯(一)、六六頁。

F.v. Wieser, Der natürliche Wert, 1889, Vorwort

考えたのである。 とにより、 理性によつて初めて取上げられたものであるが、彼は更に封建的殘滓を取除き、近代社會の形成を推進せしめると しての彼の特色を示すものであろう。 知していた。 つて妨げられない以前の原始社會が、 したのは、 しかしこの理論は「哲學的」と云われるほどに、現實をそのままに説明するものでないことはスミスも十分に承 勞働價値の認識を益々具體的現實的ならしめるばかりでなく、 との理論がそのままで吾々の現實を説明するものでないことを物語るばかりでなく、 との理論は初期未開の社會に於てはそのまま妥當するとも述べられた。ここに初期未開の社會を持 しかも漸く一般的となりつつあつた勞働價値の經驗的認識は、 自由なる社會として勞働價値の原則をそのまま實現するという啓蒙思想家と 所謂國富を增進せしめることともなると 封建的諸制約によ スミスの鋭い

が結局雇主にとつても利益であり、當然にそうなるべきであつたから、期待されもしたのである。 例えば最も重大問題である勞働の解放にしても、 當り封建的間約を取除く必要に迫られ、それが原理化されて自由の理想ができ上つたものと考えなければならぬ。 ととに注意しておきたいのは、 彼が單純な理想主義者であつたという意味でないことである。 スミスは啓蒙思想家として自由なる社會を理想として觀念的に構想していたとい スミスはただ觀念的に勞働の解放を期待していたのでなく、それ 自由の理想と云つても、それは當時の社 個 々の 「多くの時代と 問題解決に

アダム・スミスの價値含

第四、五、六號 **一九**

二二七

國民 念化され、 ことが明かだと私は信ずる」とも述べている。*このようにして個々の問題解決の必要の經驗から自由が昇華して觀 õ 經驗より、 その場合前段の經驗主義的立場を見失わないようにしなければならぬ。 更に次の問題解決の指導原理となつたのである。 自由な勞働者によつてなされる仕事の方が奴隷によつてなされるものよりも終局に於て安くつく 後段のみを見るとスミスはい かに も理想主義者のよう

* A. Smith, op. cit. p. 83, 大內譯(一)、一六一頁。

複雑な形態のものを立入つて説かなければならなくなつた。 をもつて現われることとなつた。 に進められた 計 そこで封建的諮制約を取除くと、 層が 、現われた。 そうなると勞働價値は單純な形で現われず、資本主義社會の分配によつて歪められた複 そこで勞働價値の單純な形は啓蒙的白由の原始の社會に追い歸され、 單純に無色の自由なる社會が實現せず、 第六章の問題はそれである。 實際には資本主義という色のつい スミスの説明は次 別に現實 つよう な形 Ø

産しないであろうし、 生産物を賣却して利潤を得んとするのは自然である。 によつて資本を囘收するにとどまり、それによつて雇主が何等うるところがないならば、 にこの勞働者達が原料に添加するところの價値は、二つの部分に分解する。 して他の部分は雇主が前貸したところの原料と賃金との全資本に對する利潤を支拂う。 資本主義經 原料の價格と勞働者の賃金を支拂うに足る以上に、 三濟となつて資本が特定の人々の手に蓄積されると、 またその利潤が資本の大さに比例して得られなければ、 即ち勞働者を雇つて生産を管むものは、 利潤として何物がが得られなければならない。 彼等はそれを用い、 卽ち一部分は彼等の賃金を支拂い、 小資本よりも大資本を用うることに **勢働者を雇つて生産し、** もしも彼等の生産物の賣却 彼等は勞働者を雇つて生 その生産物を交換 それ故 そ Ō

たは生産に通常使用される労働の量は、普通にその商品を購い、支配し、またはそれと交換されるものの量を左 **しうる唯一の事情でもない。賃金を前拂し、** ついて何の興味もない筈である。そとでかかる事情のもとでは勞働の全生産物は必ずしも勞働者に屬するとは限 多くの場合において彼は彼を雇うところの資本家とこれを分割しなければならない。またある商品 その勢働の原料を供給したところの資本の利潤に對してもまた別に追 の獲得

加量が支拂われなければならぬことは明かである、

とスミスは考えた。

要求する。 との部分、 の人々と同じく、 .潤と同様の事情が地代についてもある。 或はこの部分の價格は土地の地代を構成し、 從つて土地を利用して勞働し生産するものは、生産したものの一部分を地主に提供しなければならない。 彼等がかつて蒔かなかつた場所で收穫することを好み、その自然的な生産物に對してすら地代を 即ちある國の土地がすべて私有されるや否や、地主もまたすべての他 これは多くの商品の價格に於て第三の構成部分をなすもの

であると考えられた

덂 する需要が増加 こその價格がそれらの賃金及び利潤を支拂らに足る以上に、) 價格に高低があるのは、 :の價格が高い地代を生ずるか、低い地代を生ずるか、または全然地代を生じないかは、その價格の高低によるものである。 の價格の構成 ば地代は 第十一章地代論の初めに於ける地代の説明では、 種の獨占價格で、 に入り込む。賃金及び利潤の高低は價格の高低の原因であるが、地代の高低はその結果である。 してそれ以上の價格になるならば、 その商品を市場に齎すために拂わねばならぬ賃金及び利潤に高低があるからであ 土地生産物が利潤を償う程度の普通の價格にとどまるならば地代は支拂わ この超過部分が地代となる。そこで地代は賃金及び利潤とは異つた方法で 地代は價値現象でなく、全く價格現象として扱われている。 大いに餘るか、極めてわずかに餘るか、 また全く餘らないかによる いれず、 30 即ちスミスによ しかしながら ある特定の商 土地生産物に 品

しかし地代は土地生産物が需要の増大によつて價値以上の價格をもつことにより、 との超過價格を通じて 初めて地主

第六十四卷

二二九

^ ダム・スミスの價値論

第四、

==0

えたようである。 の利子これである、とも論じている。** 々の生産物の總價格は、 産物の一部を獲得するものと考えたよりも、基本的には地主が生産物價値に對し土地使用の代償として直接に要求するものと 地代論の長い説明の結論に於ても、 自然に分れて三つの部分となることは、すでに述べた通りである、土地の地代、勞働の賃金そして資本 各國の土地及び勞働の年々の生産物の全部、それと同じことであるその年

* A. Smith, op. cit. pp. 146—147, 大內譯(一)、二八二—二八三頁。

** A. Smith, op. cit. p. 248, 大內譯(一)、四六八頁。

に於て形成されると考えられていることは明かである。 のである。*この場合の價値は使用價値であろうが、それにしても地代となる價値が流通、價格より生ずるよりも基本的には生産 そして地代はその使用を地主が農業者に貸し奥えている自然そのものの右の如き力の生産物と見なさるべきものである、 も要しないものではあるけれども、その生産物が價値をもつ點に於いては、最も經費のかかる職工の生産物と異るところがない。 更に第二篇第五章で論じているところによると、農業においては、自然も人間と共に勞働する。 そしてその勞働は何等の費用

* A. Smith, op. cit. pp. 343—344, 大内驛(二)、一六〇頁。

する價格部分や、 働量によつて測られる。 社會に於ては、 の價格は結局とれら三部分のうちのいずれか一つに、またはその全部に分解せられるものである。そして進步せる もとより價格の各種の構成部分の眞貨價値は、それらの構成部分各々が購い、または支配しうることのできる勞 とれら三つが大部分の商品の價格のうちに、その構成部分として多かれ少なかれ入り込んでいると 利潤に分解する價格部分の價値をも測るのである。 **勢働はそれ自身勢働に分解するところの價格部分の價値を測るばかりでなく、地代に分解** 要するにあらゆる社會に於て、 あらゆる商品

A. Smith, op. cit. pp. 50-52, 大內譯(一)、一〇一一一〇五頁。

爵

商品價値が資本主義社會に於ては賃金利潤及び地代に分解することは第八章の賃金論に於ても同樣に説明されている。 そこで

くれる雇主に、 前を要求する。 したであろう。 いの導入後は、 かお つによると、 長くは續かなかつた。 生産物のうちから利潤という分前を支拂う、といらのである。* また資本が蓄積されると、職工は彼等の仕事の原料とその仕事が完成するまでの賃金と生活維持費とを前貸して しかし勞働者が彼自身の勞働の生産物の全部を享受したかくの如き原始的狀態は、土地の私有と資本の蓄積の最 いて 勞働の賃金は分業の簽達に基ずく生産力の非常なる改善につれて増加したであろう。 ij **勢働の生産物は元來勞働の自然的報酬または自然的賃金を構成する。** 勞働の 全生産物はその勞働者に屬した。 土地が私有されると地主は勞働者がその土地で生産したものについて地代という一つの分 彼は共に分つべき地主も主人ももたなか 土地の私有と資本の蓄積とに先立 すべての物品は漸次低落 つた。

* A. Smith, op. cit. pp. 66—67, 大内譯(一)、一二〇—一三三頁。

や土地 否定されているわけでなく、 品價値はその全部が勞働者の報酬たる賃金とならず、そのうちから賃金以外に、 ととにスミ また賃金、 の報酬たる地代が支拂われるということである。 スの云わんとするところは、 利潤及び地代の價値の尺度が勢働であることも認められているところである。 ただ勢働によつて形成された商品價値が賃金、 資本が蓄積され土地が私有されている資本主義社では、 しかし商品價値の源泉或は實體が勞働であるというととが 利潤及び地代に分配されるというので 使用されたる資本の報酬たる利潤 生産されたる商

農業上の用 價値は賃金 が偶々忘れ 値を償うととは顧みられているが、 の農業上 勞働の全生産物が賃金の外に利潤、 一の用具 其 己利潤と地代に分れ、 たためでなく、 の償却は問題とならないことを特に指摘する。 の磨損を補償するために、 一定の見解に基くものであつた。 とれらの三部分は直接にか、もしくは終局にか、穀物の全價格を形成するもので、 道具、 地代を償わなければならぬということについて、勞働の加えられる原料 機械等の消耗される價値を償うことは顧みられていない。 第四部分が必要なるかの如くである。 農業者の資本を償却するために、 即ち農業生産物の價値を論ずるに當り、 しかし農業上の一切の または彼の家畜その この場合にも これはスミ 用具の價 一の價

アダム・スミスの價値

第六十四卷

= = =

二四四

格は、 解せられると考えられた。*農産物について云えると同様のことは、 は馬の價格ならびに維持費を支拂うものには相違ないが、その全價格は直接にか、または終局に於てか三部分に分 えば耕馬にしても、 その價格はそれ自身右の三部分から成るものと考えなければならぬから、 當然に工業生産物についても云えなければなら Ø

* A. Smith, op. cit. p. 52, 大內譯(一)、一〇五十一〇六頁。

なく が解消し、 しかしこれでは資本主義經濟の問題は說明できなくなる。蓋しこの理論では第一に利潤のよつて立つ資本的根據 利潤の存在を勞働によつて說明することである。 利潤そのものも解消し、 勞働のみが殘る。 との際問題は資本と利潤を解消さして勞働のみを竣すととで

存在しない。 滯りなく消費に移されないところに最大の問題があるのだが、その點はスミスの看過したところであつた。 る元本である、」という場合にも、 全部消費されることとなる。 「すべての國民の年々の勞働は、 第二にこれでは生産物價値は終局に於て賃金、 生産されたものは滯りなく全部消費され、生産と消費はつねに一致する。『國富論』冒頭の有名な文句 從つてとの構造で再生産を考えるならば、 本來その國民が年々消費するところのあらゆる生活の必需品と便翁品とを供給す 生産と消費の一致が豫定されている。 利潤等に解消されるから資本蓄積はなく、生産されたものは 資本蓄積がないばかりでなく、 資本主義經濟に於ては生産されたものが 過剩 そして 生產

れ始めていたが、 ミスに於てこのような理論が大した無理を感じないで形成されていたのは、 未だ大なる固定資本は使用されず、資本構成のうちに於て占めるその割合も小であり、從つて資 第一に當時資本主義經濟は形成さ

この調和論は以上の價値論に深くその根を下していた。

本が自己 理論を必要とするに至るが、それは基本的には價値論の規定から問題となることも當然であろう。 **)**サス、 惡質 〕運動 リカアド (の過剰生産恐慌は現われず、生産を增進するならば、 的に増殖されず、 の時代になると、 云わば生産の手段たる段階にとどまつていたこと、 現實のとの事情は變化し、 スミス それは圓滑に消費に移されたことによる。 の理論ではそれを説明し得なくなり、 第二に資本主義經濟の初期 か であ

Ŧ, 價 値 合 成

論

買いうるところの全勢働を、この社會が年々使用するものとするならば、 場えの搬出に使用した勞働よりは遙かに多量の勞働を購い、 は にしてその交換價値が勞働のみよりなるものの數は、 づつ異ることを詳論した。 全生産物の普通または平均價値が年々増大するか、 一産物の全部が勤勉なる人々の維持に使われるような國はどこにもない。どこに於ても遊惰者がその大部分を消費 地代及び利潤が貢獻するところが多いのであるから、その國の年々の勞働の生産物は、 各年の生産物は毎年毎年前年のそれに比して非常に大きい價値のものとなるであろう。 そしてこれら二つの異つた階級の人々の間に年々如何なる比例にこの生産物が分たれるかに從つて、 ミスは商品價値が三つの部分に分解することを一般的に說いた後で、 との第六章の最後に至り、 減少するか、 文明國に於ては非常に少なく、大部分の商品の價値のうちに 理解しにくい説明をなしている。 または支配するに足るものに相違ない。 または同一であるかが定まる、 **勞働の量は毎年非常に増加するのである** 種々の商品についてその分解が そのいうところでは、 その産出、 しかしながら年々の というのである。* もしその年々 精製及び市 年々の 商品 3多少

Smith, op. cit. p. 56, 大內譯(一)、一一三頁。

第六十四条

てとれでよいのだろうか。 解するというのであつた。しかるにとこでは價値を形成するものが最初から賃金、 ある。まず賃金、利潤及び地代が先在して、それが結合して商品價値が形成される如くである。 の説明では商品價値を形成するものはもつばら勞働のみで、ただそれが資本主義社會では賃金、 でなく、利潤と地代の價値が加わるという點である。 ととで注意しなければならぬのは、 文明社會、 即ち資本主義社會では商品價値は勞働のみによつて形成されるの しかし、もしそうだとすると、 利潤及び地代であるか 前の説明は覆つてしまう。 前の説明から考え 利潤及び地代に分 の如くで

四五頁 これるという見解をとつたという解釋は廣く行われているところである。 スミスは資本主義社會に於ては、 高島善哉教授もこの點につき、 スミスが「初めの立場から他の立場へと突然急旋回を行つた」ことを指摘し「これは鮮かな思 商品價値が勞働によつて決定するという見解を放棄して、專ら質金、 例えば波多野鼎『價值學說史』 利潤及び地代より合成 第一卷、 三一買以下、

想の轉換であるばかりでなく、

明かに論理の急旋回である」と述べていられる。(同教授「アダム・

スミスの市民社會體系」

「商品にしてその交換價値が勞働のみよりなるものの數は文明國に於ては非常に少なく、 確かにととのスミス の説明は曖昧である。 もし交換價値が本來的に賃金、 利潤及び地代から合成されるとすると 大部分の商品の價値のう

かに多量の勢働を買いまたは支配するに足るものに相違ない」という場合にも、 この説明につずいて「その國の年々の勞働の生産物は、その産出、精製及び市場えの搬出に使用した勞働よりは遙 ちには地代 . 及び利潤が貢獻するところが多い」云々という場合の「勞働」は「賃金」と改めなければならぬ。 との「勞働の生産物」は「資本或

土地を利用した勞働の生産物」

の意味であり、

「……市場えの搬出に使用した勞働」は勞働そのものでなく「賃

ならば、勞働の量は每年非常に增加するのであるから」云々という場合の勞働は「勞働力」の意味であろう。 であろう。 そしてその次の、 「もしその年々買いうるところの全勢働を、この社會が年々使用するものとする

び地代で決定するというとととは全く異なる規定である。前者は所謂投下勞働價值説であるが、後者はいわば生 商品價値がそれを生産するに必要なる勞働によつて決定するということと、勞働ではなくて賃金、 更には利潤及 產

説明のうちに労働

の概念がにこのように多義的に用いられている。

後者に於ては賃金、 **費說である。** 前者に於ては賃金、 利潤及び地代が豫め存在し、商品價値はその合成によつて形成されることとなる。 利潤及び地代は勢働によつて形成されたる商品價値から派生するものであるが、 前者では賃

間及び地代は勢働價値によつて説明されるが、 後者にはこの三部分の本質を説明する理論はない

次の第七章の自然價格と市場價格の說明に至ると、價値が三部分から合成されるという見解で蔽われている。 と考えると思われる見解は最後の十數行にとどまる。 ところで前述の如く第六章の大部分は商品價値が三部分に分解するという説明で、三部分が商品價値を合成する これだけならば全體として考えると勞働による價値決定の原則を貫いたと見てもよい これとても用語に解釋を加えなければならぬようなものであ か Ь 知れ ٧ą

商品價値を合成する如くなつている。 ると勞働による價値の規定と賃金、 よる自然價格の形成と需要供給の變動によつて決定される市場價格と兩者の關係とが說明されている。 この章では勞働による商品價値の決定の最初の說明とは殆ど關係なく、 利潤及び地代の關係は消え失せて、平均的なる賃金、 平均的なる賃金、 利潤及び地代が本來的に 利潤及び地代の合成に ととまでく

それではスミス價値論はどうしてこのような變化をしたのであろうか。 勞働價値の說明 は一 般に云われているよ

アダム・スミスの質値:

第四、五、六號 二

第六十四卷

二三五

うに單

純に哲學的、

形

而

上學的

のものでなく、

第六十四条

二三六

種の經驗的理論であつたことは前述した如くであるが、

所謂

價格

Ŋ, から、 理論 的勞働 推敲に十年の歳月を饗しているのであるから、『國富論』から必ず削除されていたであろう。 前者の經驗は云わば歷史的經驗である。 説明せんとしたところである。しかし前者が經驗的だということと後者が經驗的だということとはやや異つている。 のである。 わば日常經驗として、
 が賃金、 ø 一の上に この經驗を生かしたとととそスミスをして經濟學の創設者たらしめた所以のものである。 極めて重要な説明でなければならぬ の基底が歴史的に認識された。これを前提とし、 利潤及び地代等によつて動かされていることもまた吾々が日常經驗するところであり、 築か 精彩ある敍述となつており、 後者の經驗は近代科學の實證主義的精神より看過し得ないところであるが、 れているのである。 商品が環買取引されるにつき賃金、利潤及び地代の合成による自然價格の形成が認識された 後者を説くに至り前者が必要でなくなつたのであるならば、 中世から近代に移る人間解放の歴史的變化に於て、 且つ價値論の章については特に讀者の忍耐と注意とを求めているのである 卽ち自由なる資本主義社會が形成され、 前者の經驗は一層重要であ 實際それは削除されな 商品生産に於ける一般 後者の 『國富論』の草稿 スミスが實證 そのうちに於て云 理論は前 者 的 0 Ø K

Ø われ 於ける説明であり、 そればかりか資本主義社會も勞働價値の原則から全く遊離しているのでなく、 勞働による商品價 特色であるが、 前述する 後者は資本主義社會に於ける說明であるという風に二元論的に解釋することが從來しばしば行 「値の説明と賃金、 これとても歴史的經驗の基礎を有する勞働價値の行われる場面である。 如く前者は單純に假想の社會の説明に終つていない。 利潤及び地代 一の合成による説明との關係について、 原始社會を引合い むしろそれが貫いている社會であ 前者は初 に出すのは啓蒙思想家 期未開 會に

土地 た。*これらの研究は實際にそれを等閑視し得ない後の、 蓄積が増大し資本家が相互に競爭するからであると考えられ、賃金と利潤の分配關係が强く考えられてはいなか 點より賃金の騰落が利潤 賃金と利潤、 あろう。 のであるから、 から脱して新しい社會に移るときには、勞働生産力を上昇せしめ國富を增進せしめることが賃金の增加ともなつた あるから、 勞働による價値形成 なる社會に於て自然的に發生したところの資本の蓄積と土地の私有を基礎とする資本主義的生産に於ては、資本や も勞働價値の規定をすてて、最初から商品價値が單純に賃金、利潤及び地代によつて合成されると云つただけでは、 の利用が價値生産に貢獻することも認められた。 中世から解放されてゆく新しい社會では、勞働とそ富の源泉であり價値すけられるものであるが、この自由 成程スミスでは社會の富の增進は賃金を騰貴せしめるが、それは反對に利潤を低落せしめる傾向がある。 價値えの利潤の添加を認めても、 **勞働と資本は相對抗するかの如くである。** 勞働とその報酬である賃金の關係、 の原則は主軸として維持されていたのである。 この騰落と相反し對抗するのとは全く異り、 勞働價値の原則を崩すに及ばなかつたであろう。 或は賃金と利潤との關係を立入つて追及する必要もなかつたで しかしこれはその結果が勢働價値に添加されるものであつて、 しかしこれは同一の生産物を勞働者と資本家とが分け合ふ リカアドなどの時代になされたところである。 實際に初期の資本主義經濟では資本蓄積が小で 利潤が下落するのは賃金の騰貴とは別に資本の また中世末期の窮乏 それにして

op. cit. p. 89, pp. 95-96, 大內譯(一)、一七三頁、一八六-一八八頁。

それは末梢的

現象的な説明にとどまる。

第六十四卷

二三七